# 自宅で観光のススメ

動画で眺める大田区

新型コロナウイルスの影響により外出が難しい状況です。大田区ではご自宅でも楽しんでいただける動画をYouTube「**大田区 チャンネル**」で配信しています。大田区公認キャラクターの“はねぴょん”と一緒に動画でおでかけしてみましょう。

インターネットで **大田区チャンネル** ➡ 大田区チャンネル内で **おうち時間** で検索してください。

## おうち時間を楽しもう！ ❶『郷土博物館』編

大田区立郷土博物館は、大田区を中心とした人文科学系の博物館で、考古、歴史、民俗資料などの文化遺産を保管、展示しています。この動画では、昔の人がどのように暮らしていたのかがわかります。

## おうち時間を楽しもう！ ❷『大森 海苔のふるさと館』編

大森 海苔のふるさと館は、海苔のまち東京・大森の歴史と文化を伝える博物館です。大田区の海苔づくりの歴史を、現物などの展示や学芸員さんの解説で、学んでみましょう。

## おうち時間を楽しもう！ ❸『龍子記念館』編

大田区立龍子記念館は、近代日本画の巨匠と称される川端龍子の作品を所蔵し、多角的な視点から龍子の画業を紹介しています。迫力満点な作品の数々を、説明付きで堪能できます。

## おうち時間を楽しもう！ ❹『勝海舟記念館』編

大田区立勝海舟記念館は、国登録有形文化財である旧清明文庫を活用し、海舟の功績や大田区との縁を紹介するとともに、海舟の想いと地域の歴史を伝える記念館です。海舟とはどんな人物だったのでしょうか。

イベントスケジュールのコーナーは、新型コロナウイルスの影響によりお休みいたします。

大田の観光vol.36の1ページ目で「西郷隆盛留魂詩碑」の読み方が「るこん」とあるのは「りゅうこん」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

## 史跡の向こうにドラマが見える㉝

写真提供：高野恵美子　参考資料提供：因幡純雄

### 女性初の映画脚本家 水島あやめが愛した蒲田の時代

**「よろこびも　かなしみさえもなつかしく想いあふるる　ふるき蒲田よ」**。主人公、水島あやめ最晩年86歳のときの歌に彼女の蒲田への深い愛着が滲み出ている。

新潟県の六日町に生まれた水島あやめ（本名：高野千年【ちとせ】）は女学校の時に一冊の本に出会い小説家を夢見た。それは当時、少女小説で人気の同郷、吉屋信子が書いた「花物語」だった。この作品中の主人公、「水島ちえ」があやめ色の着物を着ていたことからヒントを得てペンネームとしたことに水島あやめが受けた影響の大きさが窺える。

日本女子大学に学んでいた頃、あやめは生計を立てる必要性に迫られ映画脚本家の道を目指した。

当時、東京の幡ヶ谷にあった「小笠原映画研究所」があやめの脚本した「水兵の母」を映画化した。松竹キネマ蒲田撮影所長、城戸四郎の実家である「精養軒」で行われた特別試写会には東郷平八郎、高橋是清、犬養毅、米内光政等、日本を代表する重鎮が顔をそろえ世間をアッと言わせた。一般公開も大盛況、水島あやめの名前が一挙に知られることとなった。

あやめは1926年松竹蒲田撮影所の脚本部に採用された。彼女は大田区の矢口町（現在の下丸子）に転居し松竹の一員としてのスタートを切った。しかし、当時の映画社会は男尊女卑、特に大卒出のあやめに対する風当たりは厳しかったのだが、陰になり日向になり、かばってくれたのが城戸四郎だった。その甲斐あってあやめの手掛けた28本の脚本が映画化された。その中には、彼女の憧れであり、当時馬込文士村で健筆を振るっていた吉屋信子の3作品が含まれている。

1935年、あやめは病弱の母を自宅で介護するため松竹を退社した。当時の脚本家の仕事は仲間と寝食を共にするほどの激務で母の手厚い介護は望めなかったからだ。その後、彼女は自宅で少年少女小説の執筆と翻訳に取り組み、多くの人たちに親しまれた「小公子」「小公女」「キューリー夫人」等の傑作を世に送り出していった。

水島あやめは1990年、87歳でこの世を去ったが彼女の心の中には常に蒲田時代の思い出が占められていた。あやめの遺した次の言葉に蒲田と映画への想いが込められている。

**「もしも蒲田にシネタウンが出来る日のためにと資料を出来るだけ所蔵してきました。昔懐かしい蒲田のお役に立てれば良いと願っております」。**

岡 茂光


大田観光協会は会員の皆さま、地域の皆さまと大田の魅力をPRする活動をしています。

**大田観光協会**
**（大田区産業プラザ2階）**
大田区の「観光」についてのガイドや資料がご覧いただけるほか、見どころなどについて窓口で直接聞くこともできる“大田の観光”の情報発信基地！
(月)～(金)9～17時　(土)10～17時(休館日あり)



大田の観光 夏
発行／一般社団法人 大田観光協会
大田観光協会　検索
やってます
〒144-0035
東京都大田区南蒲田1-20-20
大田区産業プラザ2階
http://www.o-2.jp
TEL.03(3734)0202
FAX.03(3734)0203


# 大田の観光 夏


一般社団法人 大田観光協会
2020.6 No.37


## 松竹キネマ蒲田撮影所100年＋1周

監修：蒲田映画祭実行委員・岡 茂光
資料・画像提供：松田 集
参考図書：
蒲田Cinema Graph「キネマの天地」・創造物語 ～城戸四郎と仲間たち～（大田観光協会／岡 茂光 編）

### 時は 大正～昭和のはじめ　世は、空前の活動写真ブーム

**大正末～昭和初期の浅草映画街の賑わい**

大正7年頃から大衆に大人気となった「活動写真」。「キネマ」という真新しい言葉と共に、活動写真専門館は賑わった。
（当時の絵葉書より）

すべては、100年前につながっています。

「蒲田映画祭」。

そして毎年秋開催の、蒲田撮影所のジオラマ模型があります。

発車メロディが聞こえ、区民ホール「アプリコ」には

「蒲田行進曲」の

現在のJR蒲田駅では、

生前、監督は蒲田の街のことをこのように語っていました。

今年4月、惜しまれつつこの世を去った大林宣彦監督。

**「蒲田は映画のふるさと、蒲田は映画を創った」**

♪ 春の蒲田、花咲く蒲田、キネマの都・・・

**1920** 大正9年 6月
第一次世界大戦終結の2年後
関東大震災の3年前

**蒲田に映画撮影所が誕生した。**

金色夜叉

隣の八重ちゃん

100年前、現在のJR蒲田駅東口から近い「区民ホール・アプリコ」のある場所（蒲田5-37）に「松竹キネマ蒲田撮影所」が誕生した。

イラストはモノクロ映画からイメージして配色しています

**蒲の穂が生い茂る蒲田にひとりの男がやってきた**

この男「大谷竹次郎」は、ここから日本映画に新たな潮流を作り出すのである。

映画『親父とその子』の主題歌「蒲田行進曲」の一節
BRIAN HOOKER：作詞（英語） RUDOLF FRIML：作曲　堀内敬三：作詞

♪ 虹の都、光の凄、キネマの天地・・・

**その頃 蒲田モダン ブーム巻き起こる！**　乗合バスや電車が発展し、近代的な産業や文化が花開く。蒲田は銀幕のスターや新しい店、最先端に出会える憧れの街だった。

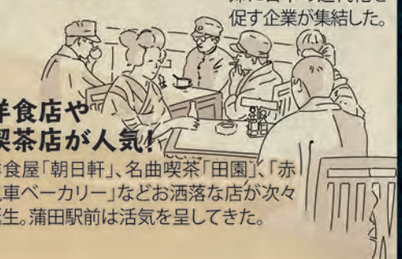
**電車・乗合バスの普及**
明治時代から大正へと、東海道線や京浜電気鉄道線などが開業するなど、交通手段は乗合バスや電車が主役となる。

**銀幕のスターに会える街!?**
スクリーンの中の憧れのスター、監督たちに会えるかもしれない、そんな期待を胸に人々が蒲田の街に押し寄せた。

**流行は蒲田から！**

「高砂香料 蒲田工場」（国立国会図書館蔵）

**近代的な工場の相次ぐ創業**
映画をはじめタイプライター、西洋食器、クリスタル製品等々、大正半ばより蒲田近郊に日本の近代化を促す企業が集結した。



**洋食店や喫茶店が人気！**
洋食屋「朝日軒」、名曲喫茶「田園」、「赤風車ベーカリー」などお洒落な店が次々誕生。蒲田駅前は活気を呈してきた。

**月刊映画雑誌『蒲田』**
大正11年創刊。
人気俳優・女優の写真や映画紹介、映画関係者の寄せた文章を楽しめた。